

令和2年3月31日

小金井市長
西岡 真一郎 様

小金井市立はけの森美術館への提言

小金井市立はけの森美術館運営協議会
会長 鉄矢 悦朗

小金井市立はけの森美術館運営協議会は、平成18年4月の美術館の開館とともに、小金井市立はけの森美術館条例第12条により、美術館における運営のあり方、事業内容、経営等について、美術館と並走しながら、諮問に応じ、多様な課題を検討してきた。

この度、第7期運営協議会委員（任期：平成28年度～31年度）より小金井市立はけの森美術館のこれまでの活動の評価と今後の課題を踏まえ以下のとおり提言する。

記

小金井市立はけの森美術館は、平成元年（1989年）に開館した財団法人中村研一記念美術館の文脈を踏襲しながら特色ある所蔵品を活かし、定期的にテーマを設けた所蔵作品展を開催するとともに、魅力的な企画展を開催している。また、同時に関連作品等のさらなる収集と保存管理を行っている。教育普及の面においては市内の9つ全ての小学校と連携し小学4年生を対象とした美術鑑賞教室や、近隣中学生の職場体験活動を受け入れている。また、多目的講義室で行われる創作ワークショップは、市民をはじめ内外の美術ファンに親しまれている。これらに加え、旧中村研一邸主屋を活用した附属喫茶棟と連携した相互サービスや、雨天時の来館者サービスを開発するなどユーザー視点の工夫を重ねている。

小金井市立はけの森美術館は、美術館の規模と立地条件から集客力や入館料収入などの増大を図るような数量的な目的を主とせず、美術館としての質の向上に努めてきた。それは次の4点を柱とする。

- (1) コレクションの充実。とりわけ、まだ必ずどこかに埋もれているはずの中村研一の作品を発掘して収集すること。これは小規模な美術館であっても中村研一作品のコレクションに関しては全国でトップクラスの美術館の責務と考えている。
- (2) 小規模でも質が高く個性的で独自性のある企画展を開催すること。
- (3) 市内の小中学校との連携を深めること。
- (4) 多目的講義室が新設されたことで、その施設を有効に活用してワークショップなどを充実させること。

この2年間は上記のいずれもが充実しており、美術館学芸員・職員の努力に敬意を表したい。

さらに平成31年3月には、旧中村研一邸主屋および茶室「花侵庵」が国の登録有形文化財となり美術館の新たな魅力が増えようとしている。美術館運営協議会としても、これを実現したはげの森美術館職員の不断の努力に大きな敬意を表したい。

一方でこれだけのスタッフと予算の中で、上記の美術館活動は相当に人を疲弊させているのではないかと危惧する。文化事業は、人が豊かになるためにあるので、人に無理をさせて疲弊させて事業を動かすのでは本末転倒である。人員配置の問題など、以前からの提言が運営上活かされているとは言い難く、展覧会等への対外的な評価だけではなく、美術館学芸員・職員の労働環境等に関する課題を解決し、より市民に親しまれ、全国的にも注目される美術館をめざして改善されたい。

1 慢性的な人員不足問題

学芸員が不足している。人が安定しないと自主企画展などの地道な蓄積ができないということを前回の提言でも課題として挙げた。平成27年から4年たっているが、この課題は変わっていない。さらに、専任の事務担当職員もいなくなってしまった。これでは、今後の美術館事業の発展など望めない体制である。

文化は人を幸せにして人を育成することであり、人を利用することにはない。芸術鑑賞はそれ自体が目的であり、手段ではない。学芸員は基本的に美術、美術作品、歴史を、はげの森美術館においては特に小金井市の美術文化、歴史資産なども研究して展覧会などを開催し、その価値を高める仕事に専念すべきである。なんでもやるのではなく、勤務の不安定さを解消して、学芸員としての職務に専念させて、キャリアを積ませるべきである。

2 建物、施設メンテナンスの必要性

全体的にもうそろそろ更新の時期である。「改修した」で、終わりではなく、改修したからこそ、安定した定期的なメンテナンスをし続けていくことが必要である。

展示室の壁など、財団時代から一度も塗り替えも、クロス張替えもしていない。美術館では、一般的に壁面の塗り替えは、4、5年に1回、クロス張替えは10年に1回が通常である。また、屋上防水のメンテナンスは、5年に一度行う必要がある。空調設備、結露とカビの問題、窓のシール打ち直しなど枚挙に暇がないが、建設後30年以上たっているのであるから、建物、施設のメンテナンスは重点的に行うべきである。特に、貴重な作品を所蔵している美術館は、一般施設とは違い細やかに行う必要がある。

3 庭園（美術の森緑地）の植生に見合った手入れの必要性

庭の手入れができていない。木が茂ってしまい、せっかく研一の時代に育った植物が全て日照不足のため現在は、密植して枯れてしまっている状態である。平成30年度に市内の特定非営利活動法人が行った美術の森緑地の植生調査結果を提供してもらい、現在の植生の状況を確認したところ、予想よりはるかに多く高木化しており、その密集度は、きわめて高く、調査のなかでも防災上の問題点が指摘されている。旧中村研一邸主屋及び茶室「花侵庵」が国登録有形文化財になったということをチャンスと捉え、美術の森緑地の高木の剪定を定期的に行い、防災上不安のない状況に持つていくこと、美観上もきちんと整備し、地面までの日照を確保し、かつて中村研一が愛した、梅が香り、カタクリなどの草花が映える庭園としての機能を向上させ、美術館来館者増につなげるべきである。

■ 評価と課題 ■

—これまでの評価—

1 事業に関すること

(1) 企画展覧会・所蔵作品展

・展覧会の方向性としては、市立美術館としての開館当初からの中村研一がらみの枠組みから、開館10年を経て、「近代イギリス風景画」展や、「模写—西洋絵画の輝き」展など、違うジャンルの作品の紹介を徐々に行うようになってきた。

・「ほとけを描く、うつす」は良い展示であった。「模写 - 西洋絵画の輝き」もあわせて、模写をテーマにしたものは、2回とも興味深い展示であった。

・いずれの展覧会も美術館が独自に企画したもので、いわゆる「持ち込み展」はひとつもない。これは美術館として誇ってよいことである。将来的には企画をさらに発展させて、このような展覧会を他の小規模な美術館に巡回させるようなことも検討してよいかもしれない。

(2) 教育普及事業について

・鑑賞教室は、システムチックになってしまっているかもしれないが、来ている子ども達は毎年違うので新鮮である。鑑賞教室や、職業体験など現在行っていることを継続して、子どもたちが芸術や美術館に興味を持つ経験を平等に与えていくことが必要である。

・学芸員によるギャラリートークは好評でファンも多い。また、音楽というものを、この美術館の中に芸術の一つとして新しくコラボレーションさせる企画として、展示室に作品を展示した状態で、プロの演奏を聴くギャラリートークの開催に挑戦しているが、これも参加者に大変喜ばれた企画であるので、ぜひ継続して開催してほしい。

2 作品の収集、調査、研究等について

・学芸員がいて、研究して、所蔵品展や企画展をやっているから作品の寄贈もある。その成果は高く評価する。今後は寄贈された作品を中心とした研究を進めてほしい。

・失われたと伝えられていた作品、まったく知られていなかった作品などが発見されて、あるいは所有者から申し出があって、美術館に収集された。これはこの美術館が中村研一研究の最前線にいることの証明である。

3 運営全般について

・茶室の有効活用について。これは前回の提言時には、課題だったが、大きく進歩した。国の登録有形文化財になったというのは大きな進歩で、ここは特筆すべき成果である。

まだ活用の具体案がないので、市民が見学したり、利用できるよう検討して、地域の活性化に繋がることを期待したい。市の観光担当、或いは市登録の茶道グループなどと連絡を取って、その活用については市で工夫してほしい。学芸員はあくまでも施設の建築的、美術的価値を研究して高めていくべきである。

・平成29年度から雨の日企画をはじめ、天候に左右されやすい館の立地条件を克服しようとする工夫と努力が見える。

4 広報について

・独自ホームページができることは評価できる。また、道案内の看板が2か所設置されたことも評価できる。

5 地域との連携について

・教育普及活動に加え、ワークショップを幼児、小学生、大人向けまで幅広く行っている点は評価できる。好評ではあるが、こごうち文庫や、結城座以外にも、地域で芸術文化活動をしている団体と繋がり、新しい企画で広く連携を図られたい。

—今後の課題—

1 事業に関すること

(1) 企画展覧会・所蔵作品展

・企画展、所蔵品展はそれぞれに工夫があり、見ごたえがあった。展覧会の質は向上しつつある。しかし、内容と方向性は毎回バラバラで、「はげの森美術館らしい展覧会」はまだ見えていない。中村研一研究と小金井地域の美術の歴史については主体的、継続的に取り組んでほしい。

・展覧会というものは全世代に対応することは難しく、中村研一の作品のみを展示するコレクション展は、その内容からして大人が対象となる。しかし学校との連携を考えれば、明確に小学生を対象とした子ども達にも親しみやすい内容の企画なども面白いかもしれない。それでも内容が充実していれば大人も楽しめるものである。しかし、現状の人員体制では、これ以上に仕事の種類を増やすことは危険である。

・写真や立体の芸術作品、絵本がテーマの展示、作者の私物など一味違う展示も期待したい。いつも2階の展示されている中村研一の使用したパレットや、水指などの作品も時には所蔵作品展の1階展示におりませてもよいのではないか。絵画だけによらず、幅広く芸術を地域で体験できる場所に今後なっていってほしいと願う。

(2) 教育普及事業について

・出前授業の拡充が期待されて、要望も多いが、週4日勤務の学芸員2名だけで週6日を開館していると、平日4日はどちらかひとりしか出勤できないので、美術館を離れることができない。後述するように、もうひとり増員されることを期待したい。あるいは週5日開館にすることも検討するべきである。

・鑑賞教室は時代の流れに適応して柔軟な対応ができれば望ましいが、学芸員や学校側の負担を軽減させるためにもある程度パターン化されていて良い。ギャラリートークを楽しみに、土、日来館される方も多いため、回数を増やす、時間帯を変えるなどして入館者数の増大に繋がるよう考慮されたい。

2 作品の収集、調査、研究等について

美術館活動の基本は、コレクションを拡充させること、内容の高い企画展を開催すること、学校連携・地域連携をしながら教育普及活動を充実させることの3点である。そのために必要なものは「美

術館に学術的情報が蓄積されていること」と「資金」の 2 点である。この美術館の予算は決して十分とは言えないので、それを補うためにも、学芸員は調査研究を熱心に行わなければならない、また、そのような環境を整える努力もされなければならない。最近の寄贈による（すなわち金を使わない）コレクションの充実は、開館 10 年以上を経てその成果が挙がってきた結果であり、今後もこの努力を続けるべきである。

3 運営全般

・第 1 に学芸員の人員問題である。もう一人増員し、3 名にすることが必要。この問題がクリアになると、展示、収集、保管、研究といった館のベースに安定感が生まれ、その先のワークショップ、教育普及活動、地域連携まで本当に望むこと、望まれることができるようになると思う。

・美術館予算について

美術館の小さな規模に比しても、予算及び人の体制が脆弱であるということはいまだに変わらない。文化という部分についてお金をかけるというのが後回しになりがちな面がある。しかしながら、小金井市のシティセールスの目玉としてはけの森美術館一帯を紹介していくのであれば、広報関連予算の充実を図るなど具体的な芸術文化施策に対する財政的な考え方を示すべきではないか。

・施設メンテナンスについて。

施設面の課題としてはお茶室の近辺は進展したので、この建物全体のメンテナンス、特に空調と展示室の壁に課題が多い。長期修繕計画が必要であるが、美術館は細やかに計画したほうが良い。

空調設備

結露とカビ問題

地盤調査

美術館の外周まわり

天井の防水、屋上防水（5 年に 1 度のメンテナンスは？）

展示室の壁（財団時代から一度も塗り替えも、クロス張替えをしていない）

通常塗り替えは、4、5 年に 1 回、クロス張替えは 10 年に 1 回

窓のシール打ち直し

・庭園（美術の森緑地）の手入れ。

平成 30 年秋の台風 24 号の際、美術館東側の水路脇に生えていた高木 3 本が根返りで美術館側に傾き、放置すると人的被害が出かねない状況となり伐採した。敷地東側の、のり面上には住宅が立ち並んでおり、今後も台風等の災害で東側の高木が倒れ住宅を直撃する可能性は高く、近隣住民から不安の声もでている。防災上の手立てとして超高木（25 メートル以上）の剪定を早急に行うべきである。

・博物館相当施設への登録について

我が国の博物館（美術館）は博物館法に基づいて、登録博物館、博物館相当施設、それ以外の博物館の 3 つに分類される。この美術館も開館 10 年を越えたので博物館相当施設への登録を検討すべき時期かもしれないが、慎重に検討すべき課題であろう。

・防災対策について

最近の気象状況とそれによる美術館や図書館などの被害の現実を鑑みると、この美術館の立地条件は大雨による被害が発生する可能性を否定できない。また、緊急避難等を告げる全館放送設備がない

のは美術館としての大きな欠陥である。他館から作品を借用している時に不測の事態を招くと美術館の信用に関わる問題になるので、防災体制は常に再確認しながら可能な限りの努力をすることが必要で、特に全館放送設備の設置を提言する。

4 広報について

- ・広報費が少なすぎる。助成金頼みでは不安定であり、継続的効果的な広報ができない。
- ・助成金に頼らず、地元積極的に広報活動を仕掛けたほうが良いし、速い。都の広報での館・カフェ入場者の増大から察しても効果が大きいのは瞭然。HP 以外にも、紙モノの媒体での PR に期待したい。
- ・広報に関しては様々なツールが増えてきたが、その根本は「こまめ」に行うことにある。ホームページができるならば、こまめに更新をして常に最新の情報を提供するように努力しなければ意味がない。
- ・広報はぜひ学芸員以外で経験と知識のある人が担当してほしい。
- ・はけの森美術館を取り巻く一帯の環境の良さも含めて魅力を大いにアピールしていただきたい。

5 地域との連携について

- ・学校との連携は大きな成果を挙げているが、地域の大人を対象とした連携体制も検討するべきではないか。また、残念ながら小金井市内には意外に文化施設が少ないので、周辺の分野にも活動の幅を広げることも求められるかもしれない。しかし、そのためには新たな人員の確保が必用となるなど困難も伴う。
- ・ボランティアで、チラシを配ったり、掲示してくれる人や、団体を募集して広報活動のお手伝いをして頂くなど新しい試みを検討する必要があるのではないか。（地元美術館への愛着も湧くと思うし、地域の方の口コミの力は大きい）しかし、それをするにも、ボランティアを育成する美術館側の人員が必要であるので、やはり、人員問題の解決が必須である。